

『メディア・リテラシー教育における「批判的」な思考力の育成』森本洋介著 / 東信堂 / 2014 年刊。

学校におけるメディア・リテラシー育成の理論と実践

多様なメディアを「批判的」に読み解く能力の育成 今日の情報化社会下、メディア・リテラシー教育は学校教育必須の課題だ。にもかかわらず、未だにわが国では、それはマイナーな動きに止まっている、こうした趨勢の中、メディア・リテラシー教育の理論的背景を明らかにするとともに、学校教育への導入に関する諸問題、カリキュラム編成、授業づくり、学習評価等につき、カナダ・オンタリオ州の事例を基に具体的に紹介・考察した本書は、まさに時宜に叶った研究と言えよう。 帯文より



本書の目的は、メディア・リテラシー教育を通して、学習者(本書の場合は中等教育段階の生徒を想定)が、「批判的」な思考力をどのように獲得しているのかを明らかにすることである。考察の対象はメディア・リテラシー教育先進国と評されるカナダ、中でも取り組みの進んでいるオンタリオ州の中等教育段階である。

本書は2部構成となっており、全部で5つの章から構成される。まず第1部では本研究の分析の視点を提示し、さらにそれを基に分析のための概念枠組みをつくる。第1章ではメディア・リテラシー教育とは何かということ、社会学および解釈学(カルチュラル・スタディーズ)と批判的教育学に関する検討から導く。本章第1節で述べたように、そもそもメディア・リテラシー教育がどのような経緯で今に至り、どのような経緯をたどってきたからこそどのような要素を含むべきなのか、ということに関してはほとんど明らかになっていない。そこで、従来はあまり議論されてこなかった批判的教育学からの議論と、実際に行われた教育プログラムについても検討しながら、本書で議論するメディア・リテラシー教育とは何かについて定義することを目的とする。

続く第2章では、第1章で明らかにしたメディア・リテラシー教育の定義を基に、その中で学ばれるべき「批判的」な思考とは何を意味するのかについて明らかにする。今日、様々な場面で用いられる「批判」および批判的思考力という言葉は、建設的な意見を意味する場合から、否定的な意味まで、使われる場面や使う人間によって、意味するところが多様である。よって、メディア・リテラシー教育という場面で用いられ、獲得が目指される「批判的」な思考が、果たしてどのような要素をもちうるのかを検討する。さらに、従来取り組まれてきた批判的思考力の育成が、どのようなアプローチによってなされてきたのかも考察する。

第3章では、メディア・リテラシー教育の評価について検討する。まず、メディア・リテラシー教育における評価が、これまでどのようになされてきたのかを述べることから始める。そして、それら先行研究で有用だと結論づけられた、「真正の評価(authentic evaluation)」という評価方法の立場について考察する。つまり、「批判的」に読み取るという、量的な指標で測ることのできない能力を、いかにして測ることが適切なのかを検討する。さらに、真正の評価モデルを、メディア・リテラシー教育で採用している例として、トロント地区教育委員会のティーチングガイドを検討した。以上のような作業から、最終的に、メディア・リテラシー教育における学習者を、どのように評価するかという視点を得ること

が第3章の目的である。

第2部である第4章、第5章では、本書で事例研究の対象とするカナダ・オンタリオ州のメディア・リテラシー教育をめぐる状況について述べ、事例研究を行う。第4章では、オンタリオ州におけるメディア・リテラシー教育について、全体的に把握することを目的とする。具体的には、まずなぜオンタリオ州でメディア・リテラシー教育がカリキュラムに導入されたのかを考察する。カナダがメディア・リテラシー教育先進国として扱われる理由は、メディア・リテラシーをカリキュラムに導入し、初等教育から中等教育まで一貫してメディア・リテラシーを体系的に学ぶシステムを構築し、それを教えられる教員を養成し、授業を有効なものにする教材を教員や教育行政、マスコミなどが一体となって開発したという一連の経緯に他ならない。なぜカナダ、特にオンタリオ州という地域で可能だったのか、まずそれを明らかにする。

同じく第4章では、次に、本書の事例研究を行う時点でどのようにメディア・リテラシー教育が運用されているのかを考察する。メディア・リテラシー教育が、オンタリオ州で正式に学校教育のカリキュラムに導入されてから20年以上経っているが、その間、同じような取り組みが続けられてきたわけではない。オンタリオ州では、メディア・リテラシー教育の内容が政治によって左右された歴史がある。メディアを「批判的」に読み解く能力を養成するメディア・リテラシー教育を、好意的に思わない個人と集団も存在する。そのような個人や集団が教育政策を左右する権力を持ちえたとき、メディア・リテラシー教育のように都合の悪い教育は排除ないし弱体化させられる可能性が高いのである。

第4章の最後では、オンタリオ州における教育評価の指針についても検討する。1980年代後半に北米で起こった成果主義的な教育評価の流れは、オンタリオ州にも及んだ。オンタリオ州は、カナダの中でも長期に渡って成果主義的な教育評価、すなわち標準テストによる成績評価を避けてきた。ではどのような形で従来の評価方法と、成果主義的な評価方法が組み合わさったのかを、1990年前後に実施された「学習に関する王立委員会(Royal Commission on Learning)」による調査報告から検討する。そして、オンタリオ州の全体的な教育評価が、メディア・リテラシー教育においてどのように運用されているのかを考察する。本書が考察対象とする時点で、どのようなメディア・リテラシー教育がオンタリオ州で目指されているのか、カリキュラム自体や、カリキュラムに関する諸議論、そして教育評価を検討することで明らかにしていくのが第4章である。

第5章では、本書の目的である、メディア・リテラシー教育における「批判的」な思考力を、学習者が身につけることができるようになったのか、もしそうであれば、授業におけるどのような要因が関係しているのかを、トロント地区での中等学校における事例研究を基に検討する。オンタリオ州トロント地区にある中等学校を事例に、実際にどのようなメディア・リテラシー教育が実施され、その中で生徒が何を学び、獲得しているのかを、参与観察や生徒の制作活動、パフォーマンスから検討していく。その際、トロント地区におけるX校、Y校の2校を分析対象とし、それぞれ「英語 メディア科」と、「映画科」というメディア・リテラシー教育を観察している。

主要目次

序章 本研究の目的

第 部 理 論

第1章 メディア・リテラシー教育とは何か

第2章 「批判(的)」「クリティカル」とは何か

第3章 メディア・リテラシー教育における学習者の評価方法

第 部 事例研究

第4章 オンタリオ州におけるメディア・リテラシー教育の導入と展開

第5章 トロント地区の中等学校における事例研究

終章 「批判的」な思考力を獲得するメディア・リテラシー教育実現に向けて

参考・引用文献

巻末資料